

ニテアラムからデアロウへ

前田, 桂子
宇部フロンティア大学講師, 九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8949>

出版情報 : 語文研究. 93, pp.1-15, 2002-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

ニテアラムからデアロウへ

前田桂子

本稿の目的

江戸語の研究においては、それまでウが担っていた機能のうちの一部を分担するようになったという流れでダロウを捉えることが一般的である^{注1}。それはあたかもダロウが出現したことがきっかけで用言を推量する用法がウからダロウへ移行していったと考えられているようである。そこで本稿では、その前身のデアロウにもすでによく似た機能があることを指摘し、用言に接続するデアロウの発達過程に言及する。

はじめに

助動詞のウは推量の助動詞と呼ばれるムに由来するが、ムは学校文法でも意志、推量、婉曲の意味で解釈される。この機能は近世に入ってから保たれており、江戸資料のウにも

- ・奥様や尉さまへ、露友が唄おきかせ申、一瓢が身もおめに **かけませう** とぞんしましたに、
(『鹿の子餅』1772年 意志)
- ・おしつけ、うぬらも釣り好に **なるう**
(『楽牽頭』1773年 情報の領域が話し手側にある推量)
- ・おちからおとし、**申ませうやうも** ござりませぬとの口上。
(『鹿の子餅』1772年 婉曲)

などの例が見られる。その一方で指定の助動詞ダの未然形にウの接続したダロウという形式が発達し、推量などの意味として機能している。しかもダロウは、ダが体言(形容動詞語幹含む)や助詞(カラ、ノなど)にしか接続しないのに対して用言にも接続する。このことから不変助動詞と呼ばれたり、終助詞^{注2}としての扱いを受けたりして、助動詞ダとは切り離して考えることが多い。

中世の一部の資料を除いて、ダロウが盛んに見られるようになるのは江戸語が形成された近世中期以降の江戸資料である。それ以前の文献資料は上方のものが中心なので、東国語の発達の経緯を知ることが難しい。それでは、ウの機能を分担するに至った経緯を辿るためには、その前身をどこに求めたらいいの

であろうか。

そもそもダロウは江戸語の形成とともに急に文献にみられるようになった語である。江戸語の形成についての詳細は先学の研究に譲るが、江戸語は近世中期頃、都の言葉であった上方語と周辺の東国語が入り混じって形成され、人工的な面を持つと言われている。とすると、同じ地域の数少ない文献を無理に求めるまでもなく、むしろ上方の資料を辿ることで形成過程を知ることができるのではないか。この成立過程を知るとは、ダロウが帯びる、本来的な意味機能を知る上で意味があると考えられる。

ダロウ（上方ではジャロウ）は、中古以来、次のようは語形変化を遂げたと考えられる。

ニテアラム デアラン(ウ) ダロウ(ジャロウ)

将来的には近世語におけるダロウの意味機能を知ることを目的に据えて、本稿では、特にデアロウに焦点を当て、中古以来、近世までの変遷をたどる。

1 ニテアラムの意味機能

1.1 中古の例

デアロウの前身はニテアラムであり、中古以降の文献に数多く見ることができる。このころにはまだ一語化しておらず、

ニ（助動詞ナリの連用形）+テ（助詞）

+アラ（動詞アリの未然形）+ム（推量の助動詞ムの終止形）

と分析できるようで、佐伯梅友（1956）によると、ニテアリ、ニテ侍ル、ニテオハシマスと同様に扱って、

- ・昔見たまへし女房の 尼にて侍る 東山の辺に移したてまつらむ。

（『源氏物語』夕顔の巻）

- ・御むすめ、后にておはします、また、まだしくても姫君などきこゆるに、御文の使とてまゐりたれば、

（『枕草子』めだたきもの）

などの例は、意味も単なる断定ではなく、「に侍り」という場合とは違った意味があるという。つまり、

「尼にて侍る」は尼であるの意ではなくて、尼であって、そうして、いるという言い方で、わかり易く言えば、尼という状態にいる、という意なのだろうと考える。

ということである。また、枕草子の例も、「后という資格でおいでになるという意に見られる。」とされ、デアルの出現の事情についても、以下の様に言及

された。

とにかく私は、「にてあり」の出はじめは、上に述べたような意味であって、「にあり」は違う意味であったと考える。そうして、源氏や枕に出てくる「にてあり」式の言い方は大体この意味であると言えるように思う。その「にてあり」が、とうとう「にあり」と違わないような用法になってくる。そうして「である」が出てくると考える。

また、南里（1995）では、時代が下って更級日記頃のニテアリが、主観的な在り方を示す、「自分で確認したが、まさしく...である（という状態である）」という特別なニュアンスを表現する語となったという。断定表現としての例は延慶本平家物語に早い例が現れているらしいから、つまり、延慶本平家物語がその変化の過渡期ということになる。

1.2 延慶本平家物語の例

本稿で扱うのは、モダリティ形式である。そこで過渡期の延慶本平家物語の中で、ニテアリに推量のム、ムズが下接したものを次に掲げ、どちらの意味の用法であるか検討する。ニテアリには、ムばかりでなく、ムズラムの下接した例も多数見られた。ムズルについては現在でも盛んに議論が続いているところではあるが、今回は「ニテアリ+モダリティ形式」という括りで捉えることとし、両者を区別しなかった。「ニテアラム」「ニテアラムズラム」のそれぞれの詳細な検討は今後の課題としたい。

「延慶本平家物語」	(巻)(頁)	(上接語品詞)
誠ニ類ナキ御祈ニテ有ムズラムト覚候。	二本19ウ	体言
法師トモ敵ニテアラムハ可難カル歎。	二末38オ	体言
ヨキ大事ニテコソ有ンズラメ。	二中47ウ	体言
如何ナル無精者ニテカ有ラムズラン	五末21ウ	体言
イカナル有サマニテ有ムズラムト思モ心苦シ	五本86オ	体言
孝子ヲ生タルニテコソ有ムズレ。	二末7オ	用言(タリの連体形)
今日軍有、明日ノ軍ニテゾ有ムズラム。	五本47ウ	体言
是許ニテゾ有ラムズラムトオボシケルニ、	五本94ウ	体言
勅定ニテ有ムズラムト思ケルニ	三本13オ	体言

このうち は、「敵という状態で、居る」と解釈でき、佐伯氏の言われる在り

方表現に当たるが、 は、主観的な 在り方 表現として解釈できそうである。用例 は「(私が見たところ,) 平凡ではない、御祈りも本当に類まれな様子であることだなあ、と思われた」、用例 は「どれくらい無精な人なのだろうか」とかいった具合で、ニテアラムの前に物事を形容する語や、程度をあらわす語があって、物事の程度や状態を表していると思われるのである。しかしその一方で は断定表現として解釈できそうである。 は「明日の軍だろう」、 は「勅定なのであろう」という程度の意味である。

これらのことから、延慶本平家物語のニテアラムも、ニテアリの未然形にいわゆる推量ム⁶の接続したものとして、一連のニュアンスを帯びた表現がある一方で、後世のダロウにつながる単なる推量表現が現れはじめていると考えられる。

また、ニテアリの接続に注目すると、大半が体言接続であって、用言接続の例としては助動詞の連体形「べき」「まじき」「たる」に限られていて全体を通して13例にとどまった。また、動詞の例は見られなかった。ニテアラムに付く用言の例は上記 の一例のみであった。

2 デアロウの意味機能

では次に、抄物資料^{注6}、狂言資料、キリシタン資料をしてみる。この頃にはすでにニテアリのニテが融合したデアルの形が一般的で、モダリティ形式のついたものもデアロウに変化している。

2 1 抄物資料

『史記抄』の例を次に示す。

『史記抄』 - デアル -	(頁)	(行)	(意味)
・亡タホトニ于 <u>瓊テアル</u> マイソ	4才	2	(断定)
・古史 <u>テアル</u> モノヲ	12才	5	(断定)
・九百六災 <u>テアル</u> ホトニ	33ウ	7	(断定)
・此時八マタ <u>周ノ初メテアル</u> ホトニ	64才	10	(断定)
・綏服 <u>テアル</u> ヲ賓服トモ云	66才	12	(断定)
・聖書 <u>テアル</u> ホトニ	68ウ	9	(断定)
・五百三十三 <u>鍔テアル</u> ニ	71ウ	10	(断定)

いずれも固有名詞や一般の名詞で、状態を表しているとは考えられない。「恒

常的実態^{注7}」の上接名詞である。延慶本平家物語のころにすでにかなり断定表現化が進んでいたわけだから、当然といえば当然ではあるが、「～という状態、ある」ではなく、断定の語として一語化した例と見るべきであろう。次にデアラウを見してみる。

『史記抄』 - デアラウ -	(頁)	(行)	(上接語品詞)
只イタツラニナモセイテヲラウニハ、マシテアラウスホトニ	6オ	2	形容動詞
百姓ヲ安セウナラハ何テアラウソ	69オ	2	不定詞
此ハ五刑ノ中テハ <u>ナンテアラウス</u> トキキハケウソ	69オ	9	不定詞
于 <u>瓊テアラウス</u> ト注ニシタソ	23ウ	12	名詞
倍前黒 + 京辟之罪戾ト云義テアラウソ	72ウ	12	名詞
囊王母カ <u>正夫人テアラウス</u> レトモ	108オ	6	名詞
三十二年ニ惠王立テ元年テアラウソ	138ウ	9	名詞
マサシク此時ノ <u>事テアラウス</u> カ脱誤シタソ	142オ	10	名詞
周トナカタカイテアラウソ	142ウ	9	名詞
是ハ日本ノ云ツケテヤラウソ	59オ	9	名詞
北正黎司地テアラウスト注ニシタト云ソ	7オ	8	名詞
顔師古ハ只火正テアラウスト云ソ	7オ	8	名詞
答ヨウスモノハ <u>司馬遷テアラウソ</u>	39ウ	15	名詞
ホムル心テアラウスケナソ	46オ	9	名詞
文章ナントニカイタラハケカテアラウソ	59オ	10	名詞
周カ火徳ナラハ南方ノ朱雀ヲ云テモアラウスズカ	146ウ	12	動詞

用例 が物事を形容した用法と思われるが、それ以外は名詞や用言の連体形について断定の意味で使われた例である。しかも、用例 は形容動詞「ましなり」の連用形にテアリが接続したと思われる例なのでデアルの意味というよりも上接語の意味合いが色濃く現れたものと考えられる。

延慶本平家物語のニテアラムよりも更に単なる推量の用法で現れる割合が増加しているようである。また史記抄にはニテアリの用例、

其人ヲ用ルカ第一ニテアラウス事ナリ 69オ 3 名詞
 も見られたが、延慶本平家物語の場合と同じく、「(他の誰でもない、まさに)その人を登用するのが一番よいと思われることである」との訳ができそうで、デアルの部分は単なる断定表現というよりも、主観的な 在り方 というニュ

アンスを帯びた表現と捉えられる。史記抄のデアラウがすでに指定の助動詞にウが接続した形で単純な推量を表現しているようなので、あるいは、ニテアラムでなければ現し得なかった表現性を復古的な形に求めたと考えることができないうか。

毛詩抄でも体言に接続する例が圧倒的に多いという状況は変わらない。ここで特筆すべき点はなかったが、名詞接続の例を示す。

『毛詩抄』デアロウ（体言接続例）	（巻）	（頁）	（行）	（上接語品詞）
・心之處之謂之志々處之謂之詩テアラウソ	巻1	7才	6	名詞
・実ニ八五色テアラウソ	巻1	23才	9	名詞
・九達ノ道中ト云心テアラウソ	巻1	31ウ	13	名詞
・多注ニ思ハ辞也トアル程ニココノ息字モ思テ有ウソ	巻1	35才	16	名詞
・不可求思ト云八思ノ於字ト同シ物テ有ウソ	巻1	35ウ	1	名詞
・爰八文王チャ程ニ上郷テ有フソ	巻1	42才	11	名詞
・召南ト云ハ六州ノ事テ有ラウソ	巻1	53ウ	2	名詞
・其ナラハ召伯ハ諸侯ノ大夫テ有ウ程ニ	巻1	55才	12	名詞
・召伯モハヤ王者ノ郷土テ有フソ	巻1	55才	16	名詞
・帰シスマイタラハ衛ノ功德テアラウソ	巻2	33才	7	名詞
・此碩人ハ周王朝ニ置タラハ宜キ人テ有ウ物ヲ	巻2	37才	14	名詞
・爰八刀筆ノ事テアラウソ	巻2	44才	10	名詞
・然ハ即位カ四十二ノ年テ有ウソ	巻3	1ウ	14	名詞
・父母ノ事テ有ウト云	巻3	3ウ	5	名詞
・注ニ云列國テ有ウソ	巻3	9ウ	14	名詞
・弋八女+以ト云字テ有ウソ	巻3	10才	10	名詞
・其ノ国ノムスメテ有ウソ	巻3	10才	11	名詞
・時分テ有ウカ乱チャ程ニ	巻3	20ウ	13	名詞
・迄テハ郷土テアラウテ候	巻3	22才	3	名詞
・玉四石一テ有ウソ	巻3	23ウ	2	名詞
・髪ヲ治ルト云心チャ程ニ其心テ有フト思フテ	巻3	23ウ	6	名詞
・重較ハ郷土ノ車ノ事テ有ウ	巻3	24才	6	名詞
・邢侯ノ妻トハヲト>イテ有ウソ	巻3	26ウ	4	名詞
・糸買ニ来タハ孟夏ノ事テ有ウ程ニ	巻3	29ウ	12	名詞

次に、体言以外に接続した例を示す。

『毛詩抄』 デアロウ (体言以外の接続例)	(巻)	(頁)	(行)	(上接語品詞)
晋齊宮ナトチャ程ニサウテアラウソ	巻3	9ウ	15	指示語
緑ノ竹ト云カ有程ニソレテ有ウソ	巻3	22オ	10	指示代名詞
未嫁ト云ハ同姓ノ嫁セヌテアラウソ	巻2	38ウ	9	助動詞
国へ帰サハ衛ノ仁アリ義アルテ有ラウソ	巻2	33オ	6	動詞
漸々ニ悟デア (ナ) ラウソ	巻1	6ウ	11	動詞?
山路ノ艱難ヲ祈ル程ニ云テア (ナ) ラウソ	巻2	39オ	4	動詞?

注目すべきは用言に接続する例である。 は運筆上の問題で「ア」なのか「ナ」なのか定かでないが、 は確例と言ってよい。 は「未嫁というのは同姓の人が嫁がないことであろう」と解釈できる。 は「義が有るだろう」の意味に解釈できるが、デアラウが「有る」に接続するということはすでにデアラウに本動詞「有る」の意味が薄れている事を示す例と言えよう。本来は用言を接続しないはずのデアロウがデアルから独立しつつある状況を窺わせる例といえる。

漢書抄でも圧倒的に体言の接続する例が多く、いずれも普通の名詞であり、従って下接するデアラウも断定表現に解釈できる。

『漢書抄』 デアロウ (体言接続の例)	(頁)	(行)	(上接語品詞)
・トモアレ上ノ義デアラウソ	6	13	名詞
・宗字當作三字デアラウソ	18	2	名詞
・月ハ三月デアラウト云	52	6	名詞
・十月ハ冬テ水チャホトニ水徳デアラウスト云テ	54	2	名詞
・漢ハ土徳デアラウト云ソ	54	7	名詞
・云云デアラウソ	72	14	名詞
・上計デアラウソ	80	4	名詞
・誰カ誤デアラウソ	80	8	名詞

『漢書抄』 デアロウ (体言以外の接続例)	(頁)	(行)	(上接語品詞)
ナテツケテヲイタラハマシテアラウソ	2	3	形容動詞
水生木ニソカナンソテアラウソ	54	8	助詞ゾ
鴻賓ト苑秘書トテアラウスヤラウ	27	13	助詞ト
鴻賓苑ト秘書トテアラウスヤラウ不知ソ	27	13	助詞ト
ナニヲ云ヤラウテアラウソ	19	10	助動詞ウ
トレソカ誤タテアラウスト云	37	11	助動詞タ
~チャホトニ飛テナウテハナンテアラウソ	19	7	不定詞

『漢書抄』の例としては、体言以外に形容動詞の語幹、助詞や助動詞など、様々な品詞を拾うことができた。延慶本平家物語でニテアラムの上接語が体言の他は助動詞の連体形「べく」「まじく」「たる」に限られていたことを考え合わせると、わずかに用法に広がりが出たかに見える。つまり、それまで主に体言のみの用法だったのが、助詞のゾやトがそれより前の事物を受けて準体句を形成することで推量の意味のデアラウを下接することができるようになったということである。とも「鴻賓と苑秘書という意味 なのだろう」と訳ができ、デアラウで受ける内容全体を推量していると考えられる。の助動詞の例も「どれかが間違ったのであろう、という」と解釈ができ、受ける句全体を推量している。但し、は推量であるはずのデアラウと共に、同じく推量の意味と思われる「ヤラウ」を使用している。はあるいはデアラウズの例ではなくて、「鴻賓と秘書とて、有らうずやあらん」なのかもしれない。「~とって、有ることがあろうか」という意味の可能性があるとすればアラウの用例としては不適格である。しかし、文脈を見た限りでは「鴻賓苑の秘書」なのか「鴻賓と苑秘書」なのかを説いた部分なので、やはりデアロウの例だと思われる。この場合、山口(1990)にある通り、「やらん」は推量の形をしていても、疑問助詞としての性格が強く、推量のデアラウと一緒に使っても重複語としての不自然さはあまりなかったのかも^{注8}もしれない。

2.2 狂言資料

次に、室町時代後期の資料を見てみる。大蔵虎明狂言集を調査したところ、体言接続の例は全部で104例見られた。その一部を示す。

狂言資料(大蔵流) デアロウ (体言接続の例)	巻	頁	行	品詞	作品名
・おすりや <u>った物</u> であらふ、	中	52	10	形式名詞	したうはうがく
・酒をのませふと思しめ <u>す物</u> であらふが、	中	53	8	形式名詞	空うで
・ <u>それ</u> であらふと思ふが	上	73	9	名詞	未広がり
・それは時の <u>ざれ事</u> であらふが、 <u>真実</u> はどれに	上	43	2	名詞	餅酒
・それは時の <u>ざれ事</u> であらう <u>真実</u> はどれに	上	59	11	名詞	三人夫
・お奏者の <u>心得</u> であらふと思ふが、	上	64	12	名詞	つくしのおく
・三人の者の <u>智恵</u> をはからふといふ <u>事</u> で有らふ	上	101	12	名詞	三本の柱
・しるしがあっても <u>ちあるもの</u> じゃアラウ程に、	上	107	6	名詞	やくすい
・汝が <u>まけ</u> であらふぞ	上	125	1	名詞	牛馬
・ <u>なんぢ</u> がまけであらふぞ	上	132	5	名詞	なべやつばち
・ <u>こなた</u> の御心得であらふ程に、	上	137	13	名詞	老武者
・ <u>おかし</u> ひ事であらふ	上	139	11	名詞	老武者

狂言資料(大蔵流) デアロウ (体言以外の接続例)	巻	頁	行	品詞	作品名
<u>尤</u> さやうであらう、	中	28	3	形容動詞	かみなり
<u>さ</u> やうであらふ、	中	35	6	形容動詞	くび引
<u>尤</u> さやうであらふ	中	167	15	形容動詞	いもじ
<u>さぞ</u> 満足であらふ	中	191	9	形容動詞	かはかみ
<u>さ</u> やうであらふ	下	27	12	形容動詞	連歌盗人
<u>こらへ</u> (堪)たらは <u>し</u> やうじん(正真)であらふ、	下	61	6	形容動詞	にわう
<u>ない</u> ない(内々) <u>さ</u> やうであらふと思ふたれども、	上	340	11	形容動詞	八幡の前
<u>よ</u> そへ行事は無用であらふ	下	58	15	形容動詞	ながみつ
<u>さ</u> うであらう、	上	96	14	指示	目近籠骨
<u>さ</u> うであらうよ、	上	227	7	指示	じせんせき
<u>そ</u> うであらふぞ、	上	251	13	指示	ふじまつ
<u>さ</u> うであらふかくれ(隠)もなひものきれで、	上	311	11	指示	ぶあく
<u>し</u> うととか <u>い</u> まのが <u>そ</u> であらふ <u>ず</u> と	上	365	10	指示	樽聳
<u>さ</u> うであらふ <u>ず</u> 、	中	14	17	指示	かみなり
それも <u>さ</u> うであらふといふ、	中	35	8	指示	くび引
<u>ま</u> ことに <u>さ</u> うであらふ、	中	127	3	指示	くいか人か
<u>そ</u> うであらふよ	中	153	5	指示	ちどり

	<u>そうであらふ、</u>	中	339	1	指示	路れん
	<u>さうであらふ、</u>	下	13	17	指示	じしゃく
②①	<u>さうであらふ、</u>	下	235	6	指示	ざぜん
②②	ばけもの(化物) <u>かであらふ、</u>	中	126	16	助詞カ	くいか人か
②③	まちなね <u>てであらふ、</u>	中	55	5	助詞テ	ぬけがら

2 3 キリシタン資料

キリシタン資料	デアロウ (体言接続例)	頁	行	品詞	作品名
・	それこそ今生後生の孝養であらうといえは、	100	13	名詞	天草本平家
・	いつかわわが身の上であらうと思うたれば	105	7	名詞	天草本平家
・	それはなを御大事であらうず	129	18	名詞	天草本平家
・	少しもたがわぬ二の舞であらうず。	175	4	名詞	天草本平家
・	それは僻事であらうずと言いながら、	180	8	名詞	天草本平家
・	今度わ木曾が最後の軍であらうず。	221	2	名詞	天草本平家
・	さだめて大勢であらうず、	331	22	名詞	天草本平家
・	ただ義経の世であらうずると内々申すと	355	5	名詞	天草本平家
・	奥州の秀衡であらうずるか、	369	11	名詞	天草本平家
・	朝家のご大事であらうず	380	14	名詞	天草本平家
・	一定この人であらうずると心得て、	384	12	名詞	天草本平家
・	これらのことであらうず。	34	20	名詞	天草本伊曾保
・	これらのことであらうず。	34	20	名詞	天草本伊曾保
・	我らが悪名を言はば、この島の瑕瑾であらうず。	41	23	名詞	天草本伊曾保
・	すなはち我らがことであらうず	57	17	名詞	天草本伊曾保

キリシタン資料	デアロウ (体言以外の接続例)	頁	行	品詞	作品名
	<u>さうであらうず、</u>	330	21	指示	天草本平家
	都のほかえ出されうずるまでであらう	100	6	助詞	天草本平家
	今死んだは <u>ましてであらう。</u>	1	19	形容動詞	天草本伊曾保
	<u>何であらうともままよ。</u>	44	10	不定詞	天草本伊曾保

大蔵流狂言、キリシタン資料とも形容動詞、助詞、助動詞に接続する例が少例ある中で、指示語につく例が目立つが、前時代と比較してもこれといった特徴は確認できなかった。

2.4 近松世話物浄瑠璃

『近松世話物浄瑠璃』	品詞	作品名
オ、へどうで湯か茶か飲みにて <u>ある</u> 。法界の男ぢゃと思へば濟むと恨みながら。	助詞二	「重井筒」
親鼠舅鼠女房鼠も <u>有るであらう</u> 。此の一家一門の鼠...	動詞	「山崎与次兵衛寿の門松」
なんと傳兵衛。町人は爰が心易い。侍なれば其のまゝ <u>切腹するであろの</u> 。	動詞	「心中天網島」
半兵衛は山城屋と聞くよりお千世が <u>来たである</u> 。氣取られまいと空惚け。	助動詞夕	「心中宵庚申」
程よい子ぢゃに馬方させる親の身は。 <u>よくよくで有らうと</u>	副詞	「丹波与作待夜の小屋節」
追左近殿の名代御奉公勤めるを。 <u>見るで有らうと</u>	動詞	「夕霧阿波鳴渡」
さて、おれはここに後まで <u>ゐるであらう</u>	動詞	「傾城仏の原 第二」

近松の頃になると用言の連体形の接続例が普通に見られるようである。中には のように、一人称に使われたデアラウでありながら、意志を表した例がある。これは明らかに自分がここにもう少し居ようという意志表現であり、推量とは解釈できない。武士などに見られる例で、一種の尊大表現とも思われる。現代語にはない表現性が、このころのデアロウには認められる。また、 は現代語であればノダロウとするとところだろう。しかし、その他の の例は、「飲みにてある」の助詞接続や、「見るで有らう」、「よくよくで有らう」など、体言以外の語に自由に接続しており、用法の広がりという点において、その後の江戸語のダロウにかなり近い様相を呈している。

3 接続

以上のことを表にまとめると、おおよそ以下ようになる。

資料	形式	上接する品詞	
		+各活用形	+未然形+ウ(モダリティ形式)
中古散文	(在り方表現) ニテアリ	体言、形容詞連体形、 形容動詞語幹 ^{注9}	体言
延慶本平家	(在り方、断定) ニテアリ	体言、助動詞連体形 (べき、まじき) ^{注10}	体言、助動詞連体形(たる)
漢書抄	(断定) デアル	体言	体言、用言(た、やらう)
毛詩抄	(断定) デアル	体言	体言、用言(云ふ、悟る、有る、ぬ)
史記抄	(断定) デアル (ニテアリ 1例)	体言	体言、用言(云)
虎明本狂言集	(断定) デアル	体言	体言、用言(ごとく)
天草本平家	(断定) デアル	体言	体言、助詞
天草本伊曾保	(断定) デアル (チャ)	体言	体言
近松世話物	(断定) デアル (チャ)	体言	体言、用言(有る、する、見る、来た)

抄物以降の資料でさらに調査の範囲を広げれば、ウの接続しない各活用形には助詞接続の例などが見つかるかもしれない。しかしデアルに用言が接続しないというのはもはや定説にもなっているので、少なくとも用言には接続しないものとして、以下を述べる。

表から、中古の散文と、延慶本平家物語ではニテアリとニテアラムに上接する品詞に区別はないと考えてよいように思う。中古の場合は恐らくニテアラムはニテアリの一活用形で、在り方表現である点において意味としても両者に差異はないと思われる。延慶本平家物語においても中古の流れを汲みつつ、断定表現が現れ出し、その後中世の初期から中期にかけて次第に主に文を終わ

らせる機能となっていくのだが、まだ正確にどの時点で断定表現が優勢になったかはわかっていないようである。

しかし、史記抄で確認した通り、デアル終止形の例はどれも断定表現であったことから、形の変化したデアルとニテアリにはおのずと表現性に違いがある。また、デアルの終止形には体言しか上接しなくなるのに対して、デアラウの方は、用言にも接続する。このことから、デアラウとデアルは前身のニテアリの場合とは違って、同一の語の単なる活用形の違いとは言い難い。

では、助動詞ム、ウ、更にはヨウが発達した中世において、なぜ一方でデアロウが独立したのか。それについては同時代の推量の助動詞との関わりを考えてみたい。延慶本平家物語の中に見える推量の助動詞には「む」の他に、「めり」「べし」「らし」があり、三者とも連体形に接続する。連体形はものごとを句としてひと括りにすることができるので、それに下接する助動詞は句全体の内容を大きく受けると考えることができる。

鎌倉時代以降になると、話者の意識を反映するムード形式の数が減少するが、現代でも推量を表す形式は、「らしい」「かもしれない」「のではないか」のように、体言や連体形（準体句）を受けることが多い。また、終助詞としての「やらん」の成立に連体形承接の要因が大きく関与したとする山口^{注11}氏の説を考えると、中世において終止連体形の合一化と、句全体を受けようとするさまざまなムード形式が発達する環境の中で、デアラウも同じく終助詞として発達したとはいえないだろう。

デアルは単に句を終わらせるだけの機能になったことから、ニテアリの形の頃には存在した用言の連体形に接続する用法が見られなくなる。それに対してデアラウは積極的に推量の意味の語として発達した。これらのことがもともと同じ語の活用形どうしだった両者が別の語として袂を分かつことになった原因とはいえないだろう。

(調査資料)

『竹取物語』、『大和物語』、『かげろふ日記』、『源氏物語』、『枕草子』（以上、岩波日本古典文学大系）、『延慶本平家物語』（勉誠社 1990）、『史記抄』（巻一～二 抄物資料集成）、『毛詩抄』（巻一～三 抄物資料集成）、『京大附属図書館蔵漢書列伝竺桃抄』（大塚光信編 尾道短期大学国文研究室 1968）、『天草本平家物語』、『天草本伊曾保物語』、『大蔵流狂言本』（『大蔵流虎明本狂言集の研究』 本文編 表現社 1972）、「曾根崎心中」「堀川波鼓」「重井筒」「丹波與作侍夜の小屋節」「五十年忌歌念佛」「冥途の飛脚」「夕霧阿波鳴渡」「大經

師昔暦「鐘の權三重帷子」「山崎與次兵衛壽の門松」「博多小女郎波枕」「心中天の網島」「女殺油地獄」「心中宵庚申」(以上『近松浄瑠璃集 上』(岩波日本古典文学大系)、「傾城仏の原 第二」(『近松全集』15巻 岩波書店 1989))

注 1 中村1948、原口1973、田中1983 (278ペ)、鶴橋1990など参照。

注 2 金田一1953参照

注 3 小松1985

注 4 仁田義雄 (1991)、宮崎和人 (1993)、森山卓郎 (2000)、木下りか (2001) 参照。現代語の文法研究では、人称との関わりや情報の領域に関わる研究が主流のようである。確かに、ダロウには「確認要求」の意味や「判断」の意味といった複数の機能があって、「推量」と一括りにするには問題がある。また、これらを「推論の帰結」「推論の帰結の非確定性」という共通性で説明しようとした研究もある。今回の調査のうち、抄物は資料の性格上、確認要求の表現は出にくいと思われるが、狂言には確かに確認要求と思われる例が見られた。今後、江戸の会話が現れる資料で現代語との違いを見てみたい。

注 5 坪井2001参照。

注 6 「ニテ有ラム」は「ニテアルラム」と読む可能性があるため「ニテアラム」、または「ニテ有ム」の例だけを取り上げた。

注 7 吉田1997では、ニテアリに上接する語をそれぞれ、一時的・属性、恒常的・属性、恒常的・実態に分類し、今昔物語集以前にはが見られないことから、それまでのニテアリは断定表現ではないという。ニテアリが存在表現から断定表現へ移る過程は、上接名詞の拡張と捉えることができるという結論を導いている。

注 8 現代語のダロウはカモシレナイ、ヨウダ、ラシイと異なり、疑問形になることで特異であるといわれる。

注 9 中古のニテアリの接続は、以下のようなものが管見に入った。主に用言の接続した例を確認しておく。

おほきにてあり (竹取)、きよらにてありける (大和)、さばかりにてありぬべくなん (源氏)、をかしげにてあり (源氏)、事なげにてあるを (源氏)、~のやうにてある人 (源氏)、さまざまにてあり (源氏)、こはごはしきにてあり (源氏)、ちひさきにてあり (枕)、こまやかにてあり (かげるふ)、あらゝかにてあり (かげるふ)

用言は、形容詞の連体形、形容動詞の語幹に接続する。(但し、用言接続のニテアラムの例は管見に入らなかった)。しかし用言を受けるとはいても、ニテアリの前に「もの」などを補えることから、準体句を受けていると考えられる。

注10 延慶本平家物語でも体言接続が圧倒的に多いが、わずかに次のような例を見ることができた。

イカナルベキニテアルゾ (二本99オ)、流サルベキニテ有シニ (一本81オ)、都ヲ出ベキニテ有ヲ (三末58オ)、マツマジキニテ有ケレバ (二本101オ) など。

注11 山口1990参照。

「終止形承接の『や』は、その承接法において、本来の終止形が退化していく時

代を生き延びるには、何らかの自己変革を迫られていたことになる。(中略) それに対して連体『なり』的形式『にあらん』の補強を受けて『や』から転成した『やらん』は時代の流れに適應できるものとなった。」(70p)

参考文献

- 中村 1948 中村通夫「東京語における意志形と推量形」『東京語の性格』川田書房
金田一 1953 金田一春彦「不変化助動詞の本質(上)(下)」国語国文22-2・3
佐伯 1956 佐伯梅友「ニテアリからデアルへ」国語学 26集
原口 1973 原口裕「江戸語の推量形」静岡女子大学研究紀要6
田中 1983 田中章夫『東京語 その成立と展開』明治書院
小松 1985 小松寿雄「江戸の形成と江戸語」『江戸時代の国語 江戸語』東京堂出版
鶴橋 1990 鶴橋俊宏「江戸語の推量表現について」野州国文学46
山口 1990 山口亮二「疑問助詞『やらん』の成立」語文 第53、54集
仁田 1991 仁田義雄『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
宮崎 1993 宮崎和人「『～ダロウ』の談話機能について」国語学175集
南里 1995 南里一郎「ニテアリ 語法の表現性をめぐって」語文研究 第79号
吉田 1997 吉田永弘「断定表現『にてあり』の成立 上接語に注目して」國學院
雑誌 1086号
森山 2000 森山卓郎『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
木下 2000 木下りか「ダロウの意味」阪大日本語研究13
坪井 2001 坪井美樹『日本語活用体系の変遷』笠間書院

(まえた けいこ・宇部フロンティア大学講師 本学大学院博士後期課程)